不登校の「居場所」に関する臨床心理学的研究

― 自我を再体制化するプロセスに視点をあてて ―

松 尾 治 子

Ⅰ 問題と目的

不登校とは「学校教育という営みにはらまれる何らかの要素との関連において長期欠席が生じ，そこに悩みや不安や葛藤が生まれているもの」であり，教育・臨床，どちらの問題でもある（滝川，2012）。山中（1978）は，不登校について「外的には社会的自我の未成熟とされる消極面をもちつつも，内的には＜退行＞しかも，積極面を併せ持つ時期＜内閉＞であるとし，治療としては，＜内閉＞をできる限り保証し，彼らの話に＜耳を傾け＞しっかりと＜内閉的な旅＞の同行者として付き合い，ひたすら彼らの＜内的成熟＞を待つとしている。

1992年文部科学省（以下，文科省）は，不登校対策として“登校拒否はどの児童生徒にも起こりうる”とし，学校現場に「心の居場所」としての役割を果たすよう求めた。また，不登校に対して，原則“学校復帰”を目指し取り組んだ結果，2001年をピークに，不登校は減少してきた。しかし，2012年を境に再び急増し，2018年度の小中学校における不登校は，164,528人となった（文科省，2019a）。また，潜在的な登校拒否傾向を有する児童生徒の存在（河原，2016）や，義務教育期間卒業後の支援の問題（斎藤，2014）が指摘される中，藤岡（2005）は，“不登校を考えることは現在の日本の福祉，教育，医療，更生・司法，産業を考えることである”と述べている。一方，文科省（2019b）は，これまでの，学校復帰を目指す方針を改め「学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく，児童生徒の自立を目指す」とした。山中（1978）のいう＜内閉＞の保証の重要性が学校現場に浸透したと考えられる一方で，不登校の子どもの過ごす「心の居場所」のあり方が問われることとなったのである。

思春期の不登校について，山崖（2014）は，生育過程においてアイデンティティの形成に不具合を生じたため，「内なる声」を聞き，醸造し発酵させるための時間が必要であるとしている。また，久留・餅原（2019）の，「不登校の子どもは自我を再体制化するために“学校に行かない”と主張している存在」からも，不登校支援は，内閉し自我を再体制化するため“受容的で脅威のない”「心の居場所」となる関わりが重要と考える。「居場所」は，臨床心理学的には，“ありのままで受け入れられること”と定義されることが多いが，不登校支援における「心の居場所」のあり方は，当事者の語りからの「より現実に即した」知見が必要であると考える（中藤，2013）。

そこで，本研究では，①不登校の子どもが，学級集団の他者との関わりを回避していくプロセス，②自我を再体制化できるような，「心の居場所」にて不登校を克服していく変容のプロセスを探ることを目的とする。さらに，不登校の子どもの“自我の再体制化”について考察する。

Ⅱ 方法

調査協力者：不登校の支援者を通して，20歳以上の社会人で，中学生の時期に不登校状態から回復した経験をもつ成人12名に依頼した。
12名の面接後に，今回のテーマである「自我の再体制化」を達成しているかどうかを検討した結果，10名を分析対象者とした。

調査期間：2019年8月～9月

調査場所：大学院心理臨床相談センターあるいは，研究協力者の望む守秘可能な場所を相談の上で決定した。

インタビュー内容：インタビューガイドに沿った半構造化面接でのインタビューを行った。
①基本調査（年齢・中学時の家族・教育歴等）②不登校に至った経緯③教室に行っていない時に過ごした場所（心の「居場所」）について
④不登校が解消されたと思えた時期とそのプロセスについて。

分析方法：研究協力者へのインタビューで得られたデータを，全て逐語記録に起こし修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）で，分析した。木下（2003）は，M-GTAが適している研究として，①ヒューマンサービス

領域②研究対象がプロセス的な特性を持っていることをあげている。

Ⅲ　結果と考察

分析の結果，最終的に22のカテゴリー（以下＜　＞で示す）と71の概念（以下【　】で示す）が生成された。

明らかにされた「不登校の子どもが学級集団の他者との関わりを回避していくプロセス」は，「受け入れられない＜価値観のズレ＞や【思春期ゆえの侵害】を受けたり【ありのままでいられない】状態で頑張るほど＜他者評価＞に過敏になり，自我関与の高い状態では，脆い自我は傷ついてしまい＜自己否定＞に陥ってしまう。さらに，＜大人の無理解＞や＜落ち着かない環境＞のため，登校を続けざるを得なくて＜身体がしんどさを語る＞ようになる。また，登校できない＜自分を責め＞しまいには，＜精神的に不安定＞になり，内閉せざるを得なくなってしまう。または，＜家族の無理解＞が強いため，＜内閉＞することもできずに＜別室登校＞を余儀なくされる」というプロセスだった。

また，自我を再体制化できるような，「心の居場所」にて不登校を克服していく変容のプロセスは，「＜内閉＞し＜受け入れてくれる人との信頼関係＞の中で，自分と向き合い＜このままではいけない＞と思い，新たな「心の居場所」にて＜受け入れる人との信頼関係＞を築くことで＜あるがまま＞を受け入れられ，＜自己受容＞していく。＜自己受容＞ができると，他者受容ができ＜他者の価値観を受容＞できるようになっていき＜自己一致し，動き始める＞のである。そのような状態で＜自然に背中を押してくれる環境＞があり＜再登校の不安＞はありながらも，再登校・新たなステップへと進んでいく」というプロセスが生成された。

「居場所」についてのセオリー：調査協力者全員から得られた具体例から，不登校の子どもが，自我を再体制化するための「心の居場所」は，本論文の定義である「ありのままでいられること」に加えて【楽しいと思い笑うこと】【自分のペースで】が生成された。【楽しいと思い笑える】ことは，深津（2016）の，自我を助ける適応的退行，即ち「自我が退行して欲動の解放を楽しみ，遊べる能力」である。

これらのことから，不登校の子どもは【自分らしくここにいてもいいと思え，楽しく笑うことができ，自分のペースで出来ること】が保証された時に，“自我を再体制化”して，新たなステップへと進むことができると考えられる。

また，8名の具体例からは，登校しようと思った時に【背中を押してくれる環境】があった。このことは＜内閉＞を保証する中で，山中（1978）のいう，彼らの話に＜耳を傾け＞しっかりと＜内閉な旅＞の同行者として付き合う存在が，啐啄同時のタイミングで関わっていくことの重要性を示唆していると考えられる。また，中西・鑪（1981）は，自己構造の再体制化とは，①視知覚の変化，②対人知覚の変化，③自己知覚であると述べている。今回の研究では，不登校の子どもが＜内閉＞し，それぞれの「居場所」で，①＜他者評価＞→＜あるがまま＞，②＜価値観のズレ＞→＜価値観の受容＞，③＜自己否定＞→＜自己受容＞と変容し不登校を克服していくプロセスが生成されたと考えられる。

引用文献

久留一郎・餅原尚子（2019）．臨床心理学－「生きる意味」の確立と心理支援－．八千代出版，pp.100.

藤岡孝志（2005）．不登校臨床の心理学．誠心書房，pp.1-9.

深津千賀子（2016）．心理臨床大辞典，2016改訂第10版．培風館，pp.1050-1051.

河原省吾(2016).不登校（登校拒否）．心理臨床大辞典改訂第10版．培風館，pp949.

木下康仁（2003）．グラウンデッド・セオリーの理論特性．グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践．弘文堂，pp.25-34.

文科省(2019a)．不登校児童生徒の支援の在り方についてhttps://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm

文科省（2019b）．平成30年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について．https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf.

中藤信也(2013)．集団における居心地の悪さ－青年期における居場所の視点から－．心理臨床学研究，31，4，618-627.

中西信男・鑪幹八郎（1981）．心理学10，自我・自己．有斐閣双書，pp.132-134.

斎藤環(2014)．不登校・ひきこもりの「長期間を経たその後の状態」について．臨床精神医学，43，10，1481-1485.

滝川一廣(2012)．学校へ行く意味・休む意味.不登校ってなんだろう．日本図書センター，pp.31

山崖俊子（2014）．不登校の背景の変化．精神療法，40，4，508-511.

山中康裕（1978）．思春期内閉－治療実践よりみた内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理－．中井久夫・山中康裕（編）．思春期の精神病理と治療．岩崎学術出版社，pp21-22.